

架け橋プログラムの全市展開とその充実に向けて

講師 古賀 松香 京都教育大学教授

■架け橋プログラムを全市展開する理由

【すべての子どもの学びを保障するために】幼児教育施設と小学校などの間にある育ちの環境の切れ目をつなぎ、子どもの育ちの障壁とならないように大人が真剣に取り組みましょう。子どもが主体的に自己を発揮して、新しい学校生活をつくり出していくために、何が改善・工夫できるか検討し、子どもの学びを保障しましょう。

【子どもを主体に据える授業改善という視点】「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学び」、「協働的な学び」の推進は、すべての学校にとって重要な授業改善の方向性。学校全体の取組の基本構造に架け橋プログラムを位置づけてほしいと思います。特別なものではなく、今、取り組んでいることが架け橋プログラムにつながっています。

【全市体制の必要性】今までの研究にたくさんのモデルはあります。先進校で学んだ先生が異動後に学びを活かせるように、子どもには既に発揮できる力があると見取り、活かす学校生活、授業づくりへ。校内研究組織・テーマに組み込み、実践改善研究につなげていきましょう。

■架け橋期の教育の充実に向けて

対話の場を管理職同士、主任同士、担任同士というように多層的に開くことが異校種間の対話には重要。互いの違いやズレがあるからこそ、新たな実践の可能性が生まれます。

【求められる異校種間の対話】異校種間の対話とは、それぞれの組織の異文化に触れ合い、自組織の当たり前を自覚化・相対化し、生じる揺さぶりを新たな実践への期待の下で楽しみ、これまでの当たり前を超えていこうとする契機となるものです。

【対話できる場の構築→関係性の構築】それぞれのタイミングで、対話の場が持てるか年間計画に位置付け、可能な範囲で具体的な実践を持ち寄って話し合うような工夫をしましょう。

【全市展開のバックアップ体制を活かす】「幼保小連携・接続窓ロー一覧」（6月に各所属所に配布済み）「京都市の小学校教育の概要動画」（11月に全市幼児教育施設に配布済み）などを活用しましょう。

■今を超えようとする体制づくりを

【今を確かめ明日を創る】これまで大切にしてきた、価値・理念・実践、現在の多様な子どもの姿と実践の工夫と課題、どちらも大切に見据えて、これからの子どもたちを育てる実践について対話しましょう。

【組織体制をつくるリーダーシップの必要性】アイデアが生まれる創発的な組織づくりをし、現場の挑戦が生まれれば「やってみなはれ」と言えるフォロー体制を！

【情報と交流の範囲を小学校区へ】持続可能な対話の場を小学校区でつくりましょう。既にあるものを開く、情報を共有する、実践を見合い、視点を共有して語り合うなど、大切にしたい教育・子ども像を語り合ひましょう。持続することで漸進的な更新を目指しましょう。肯定的な捉えを共有し、課題を少しずつ解決していきましょう。

【小学校同士/幼保同士の対話も】多様な現場の実践とその工夫を共有する研修の重要性。対話を開き、持続していきましょう。対話の場を開くことの良さを子どもの姿を通して実感することを大切にしましょう。

■手応え感・実践のおもしろさを共有する教育共同体へ

違いやズレが対話と実践創造のエネルギーとなります。対話は大人のまなざしを変え、まなざされる子どもを変えます。子どもの生き生きさ、実践のアクチュアリティを楽しみましょう。

*上記の要約は、講義の際の資料をもとに編集したものです。

DVD貸出中

アンケートから

対話が、大切ということが印象に残りました。



幼保小の職員がまずは子どもを真ん中に据えて話し合うことが大切であるとよく理解できました。



特別なことをするのではなく、幼保小それぞれが大切にしてきたものをつなげていくことと理解しました。



R7から全市展開されるとのこと、すごいことだと嬉しく思います。プログラムありきではなく、実践の足跡がプログラムになるという考え方が大切だと思いました。対話を重視し「手応え感・実践のおもしろさを共有する共同体へ」幼保小連携・接続が進んでいくことに期待します。

